

埼玉育ちのグローバル人

ちょっと海外に行ってみた

第2回「スコットランドは別の国」



埼玉県マスコット
「コバトン」

近藤眞理子さん



スコットランドの首都エディンバラに引っ越しをし、大学も変わり、新しい生活が始まりました。引っ越す前からエディンバラには何度も来ていて、かなり慣れて勝手がわかっていたつもりでしたが、実際に住んでみるといろいろ新しい発見がありました。スコットランドは、ロンドンなどがあるイングランドとは、全く別の国です。(ついでながら、イギリス連合王国を形成するウェールズと北アイルランドも、程度の差こそあれそれぞれ別の国です)。

民族も歴史も言語も法律も貨幣も主な宗教のキリスト教の宗派も違います。日本では、イギリス＝イングランドのような感覚があるかと思いますが、スコットランド“地方”ではなく、いろいろな面で異なる別の国です。特に、1707年に隣のイングランドと連合王国を結成したとき失った国会が、1999年に再び設置されてからは、スコットランドの政治はこのスコットランドの国会で決定されます。当然首相もいます。まあ、ずっと領土などを巡って争ってきた国同士が連合王国を結成したのだから、いまだに様々な違いや問題があるのは当然でしょう。少なくとも、スコットランド人に間違っても「あなたたちイングランド人は」とか「ここイングランドでは」などとは言わない方がいいでしょう。

細かいことは、スコットランドの歴史や社会の本を読んでいただくとして、日々の生活で違いを実感したのは、言語です。スコットランドも公用語



エディンバラ旧市街

は英語ですが、ちょっと聞いただけだと英語に聞こえない。単語や表現も独自なものが沢山あって、最初は非常に苦労をしました。また英語の学び直し。また、北部ハイランドや諸島部では、今でもスコットランドの元々の言語だったケルト語系のゲール語(Gaelic ガーリックと発音)が話されていて、ゲール語のテレビ番組や新聞もあります。ハイランドや諸島部では、道路標識はゲール語と英語で書かれています。ただ、スコットランドの英語は慣れてしまうと、他の地域の英語よりも日本人には簡単です。二重母音もあまりないし、綴りのとおりローマ字読みをするとほぼ合っています。例えば“house”は「フス」、**“learn”**は「レアン」、数字の“34”は「スィアティ フォア」くらいに発音するとしっかり通じます。

スコットランドの通貨はイギリスのポンドですが、紙幣は地元の各銀行が独自の紙幣を発行しているため、イングランド銀行の紙幣とは異なりま

すし、一ポンド硬貨のデザインも微妙に違います（どの地域の貨幣でもイギリス全土で使えます）。



エディンバラ中心部ー中央奥がエディンバラ城

大学進学の際に受ける全国共通テストもスコットランドは独自の試験があります。大学もイングランドは3年制ですが、スコットランドの大学は4年制です。

イギリス王室も 1603 年にイングランド王のエリザベス一世が亡くなったため、スコットランドのシュアート王家のジェームズ六世がスコットランド王でありながらイングランド王のジェームズ一世になるという王家の統合が起きたので、私たちが世界史で習ったイングランド王ジェームズ一世は、スコットランド王ジェームズ六世、ジェームズ二世はスコットランド王ジェームズ七世のことです。その後のイギリス王家の(女)王はイングランド(女)王○世、スコットランド(女)王○世と二つの名前があります。エリザベス二世はイングランド女王としては二世ですが、スコットランド女王としては一世ですし、現在のチャールズ三世もスコットランド王としては過去にスコットランドにはチャールズという名前の王はいなかったため、スコットランド王チャールズ一世です。

博士課程を始めて切実な問題に直面しました。お金がない・・・一応自分の経済状況は認識して、進学したのですが、そのころまでにはなけなしの貯金も底をついていました。大学で少しTAや非常勤の仕事をさせてもらっていましたが、授業料と

生活費を賄えるほどの収入にはならず、配偶者も薄給の研究員をしながら博士課程をやっている状況で、経済的にはとても大変でした。

ちょうどそのころスコットランドの観光協会が外国語（＝英語以外）でもガイドができる公認ガイドの育成を始めるということを知ったので、スコットランド観光局の公認ガイドのコースを受講することにしました。エディンバラ大学のスコットランド学科の夜間コースで半年の間週二回、歴史、政治、自然、植物、地質、建築など様々な分野について半年の講座を受講し、週末は国内の観光地や観光名所に行って、ガイドの仕方を学び、最後に筆記試験と実地試験を受けるという結構大変なコースでした。公認ガイドの資格を得れば、ツアーや観光名所で正式にガイドができるようになります。ガイド料は大学の非常勤よりもはるかによかったので、生活と授業料を払うため、毎年6月中旬から9月中旬まで、ツアーと一緒にイギリス中を回るガイドの仕事に専念しました。おそらくガイドの仕事をしなければ、2年くらい早く学位論文が書けたらと思うのですが、背に腹は代えられなかったため、毎年三か月だけ頑張りました。短期的には時間の無駄だったかもしれませんが、今振り返ってみると、貴重な経験ができたと思います。ただ、夏の三か月以外は、絶対にガイドの仕事はしないというけじめだけはつけました。でもつくづく、私はサービス業には向かないなと思いました。お金のためだけに割り切ってやりました。そのころ、私がガイドしたツアーに参加された方々、ごめんなさい（ぺこり）。



スコットランド新国会議事堂

6年かけて博士論文を書いて、当時はインターネットもそれほど普及していたわけではなく、日本で仕事を見つけるのは容易ではなかったのも、そのままスコットランドで就職し、最初はスターリング大学、その後グラスゴー大学、エディンバラ大学で教鞭をとりつつ、もう一生日本に帰らないのかなと思っていた矢先、日本で仕事が見つかり、2000年の4月にとりあえず単身で帰国しました。



ハイランド牛-黒牛や白牛もいます